➢ シャールズスパイト（SHIRL'S SPEIGHT）＝ カナダ

牡６歳・鹿毛（アメリカ産・2017 年５月９日生まれ）
父：Speightstown ＝ 母：Perfect Shirl（母の父：Perfect Soul）
馬 主 ： チャールズ・フィプケ氏
調教師 ： ロジャー・アトフィールド
騎 手 ： ジョアン・モレイラ
戦 績 ： 全 14 戦５勝、２着１回、３着２回
総獲得賞金 ： 約１億 3,300 万円
主な戦績 ： ’22 メーカーズマークマイル（G1） １着
’22 タンパベイステークス（G3） １着
’20 加マリーンステークス（G3） １着
’22 ブリーダーズカップマイル（G1） ２着

シャールズスパイトは、カナダのエカティ・ダイヤモンド鉱山を発見し事業で成功を収め、日本でも馬主資格を持つチャールズ・フィプケ氏が生産し、所有するアメリカ産の６歳牡馬です。芝、ダート、そしてオールウェザーで出走歴があり、芝の G1 や、オールウェザーの G3 を勝っていますが、ダートでの勝鞍はまだありません。ロジャー・アトフィールド調教師は、これまでジャパンカップとエリザベス女王杯に管理馬を出走させていますが、今回のシャールズスパイトはフェブラリーステークスに参戦する最初の外国調教馬となります。

シャールズスパイトは父がモズスーパーフレア、リエノテソーロ、マテラスカイなどの活躍で日本でもお馴染みのスパイツタウン（その父ゴーンウエスト）、母は 2011 年のブリーダーズカップフィリー&メアターフ（G1、芝 2,200m）の覇者パーフェクトシャール（母の父はサドラーズウェルズ直子のパーフェクトソウル）で、祖母のレディシャールはフラワーボウルハンデキャップ（G1、芝 2,000m）の勝馬。母の半兄にウッドバインマイル（G1、芝 1,600m）やジョーハーシュターフクラシック（G1、芝 2,400m）を制したシェイクスピア（父シアトリカル）、母の半姉にニューヨークステークス（G2、芝 2,000m）勝ちなど重賞 2 勝のレディシェイクスピア（父シアトリカル）がいて、近親は芝で好成績を残しています。

カナダのウッドバイン競馬場を拠点にするロジャー・アトフィールド厩舎に預けられたシャールズスパイトは３歳時（2020 年）の７月にカナダのウッドバイン競馬場でラファエル・ヘルナンデス騎手を鞍上にデビュー。好スタートから主導権を握ると芝 1,400m 戦を 8 馬身差で逃げ切って、幸先の良いスタートを切りました。この勝利に手応えを掴んだ陣営は２戦目に重賞のマリーンステークス（ウッドバイン、G3、全 1,700m）挑戦を選びます。ヘルナンデス騎手で臨んだここは２番手追走から４コーナーで先頭に立って優勝、オールウェザートラックを難なくこなして２連勝を飾りました。強気で臨んだウッドバインマイル（G1、芝 1,600m）はさすがに相手が強く、勝ったスターシップジュビリーから 5 馬身半離された 7 着に終わりました。この時の鞍上は現地で活躍する木村 和士騎手でした。この年、最後の実戦となったトロントカップステークス（ウッドバイン、リステッド、芝 1,600m）は再びヘルナンデス騎手で先行しましたが３着。３歳時を４戦２勝で終えました。

4 歳になったシャールズスパイトはアメリカ・フロリダ州のガルフストリームパーク競馬場で行われた 1 月の条件クレーミング（ダ 1,200m）にジョン・ヴェラスケス騎手で参戦、8 番手からの競馬で徐々に差を詰めたものの 5 着。勝馬は後に日本に種牡馬として輸入されるミスチヴィアスアレックスでした。この後、靭帯に問題が見つかって戦列を離れたシャールズスパイトはほぼ一年間を休養に充てます。復帰戦は 12 月の条件クレーミング（ガルフストリームパーク、全 1,660m）で、ヘルナンデス騎手で徐々にポジションを押し上げたものの直線で後退し、8 頭立ての 7 着に終わりました。

シャールズスパイトにとって最良のシーズンとなった昨年は 8 戦 3 勝で 6 着以下はなし。5 歳シーズンの幕開け

となったのは 1 月のフロリダ州のタンパベイダウンズ競馬場で行われた芝 1,700m の条件クレーミングで、アントニオ・ガヤルド騎手で 2 番手を進み、直線半ばで抜け出すと 2 着に 1 馬身 3/4 差をつけて優勝しました。復調の手応えを掴んで 2 月のタンパベイステークス（G3、芝 1,700m）に駒を進めたシャールズスパイトは、女性騎手のエマジェーン・ウィルソン騎手を背に中団の内でレースを進め、1 馬身半差の差し切り勝ち。中団に控える競馬を実らせて、新境地を開拓しました。そして、迎えた 4 月のメーカーズマークマイル（キーンランド、G1、芝 1,600m）。ルイス・サエス騎手を鞍上に 8 頭立ての 6 番人気で出走したシャールズスパイトは、7 番手のポジションから直線強襲。最後の 200m で外から猛然と追い込み、ゴール前で 1 番人気のメイスンをハナ差かわして、デビューから 9 戦目にして G1 タイトルを掴みました。

勢いに乗って挑んだ 5 月のターフクラシックステークス（チャーチルダウンズ、G1、芝 1,800m）はサエス騎手が騎乗し 2 番人気に推されたものの、5 番手から伸びを欠いて勝ったサンティーンに 7 馬身離された 4 着。この年、5 戦目となったサルヴァトールマイル（モンマスパーク、G3、ダ 1,600m）はウィルソン騎手で臨みましたが、5 頭立ての 4 番手から勝ち負けに加われず、マインドコントロールに 6 馬身 1/4 離された 3 着で入線。久々のダート戦で、芝で鮮やかだった差し脚は不発に終わりました。7 月のコノートカップ（ウッドバイン、G2、芝 1,400m）はウィルソン騎手で中団のまま 5 着、9 月のウッドバインマイルもウィルソン騎手で後方に控えましたが、4 コーナーで不利もありヨーロッパから遠征したゴドルフィンの G1 馬モダンゲームズに 7 馬身離された 4 着。収穫のないままに 4 連敗を喫します。

シーズンを締めくくる 11 月のブリーダーズカップマイル（キーンランド、G1、芝 1,600m）にサエス騎手で参戦したシャールズスパイトは、さすがに人気がなく 14 頭立ての 13 番人気でしたが、初 G1 を掴んだ舞台で一変。中団の内から直線で外に持ち出しますが、勝ったモダンゲームズ（2022 年のエクリプス賞 Male Turf を受賞）に進路を塞がれるような形になり、更に外への進路変更を余儀なくされます。それでも猛追して 3/4 馬身差まで迫る 2 着に健闘。ヨーロッパの G1 ウイナー、キンロス（3 着）以下を抑えて、敗れて尚強しを思わせました。

今回の来日は初の海外遠征、経験が少なく勝鞍のないダートと、課題は少なくないものの、展開がはまった時の末脚には目を見張るものがあります。招待レースではないフェブラリーステークス出走の理由について、陣営はダートの G1 を勝つこと、そして（馬を売るつもりはないものの）シャールズスパイトの種牡馬としての魅力を日本の生産界にアピールすることを挙げています。同時にフェブラリーステークスをステップに 3 月のドバイターフに転戦する予定があることも明らかにしています。

2022 年度ワールドベストレースホースランキングではレーティング 116（芝・マイル）。マイル戦は 6 戦して 1 勝、2 着 1 回、3 着 2 回と高い適性を示し、さらに 1,600～1,700m まで対象を広げると全 5 勝のうち 4 勝がこの距離区分でのものとなります。北米調教馬が日本のダート重賞を制したのは 2003 年ジャパンカップダートのフリートストリートダンサーの一例のみ。シャールズスパイトが勝てば 20 年ぶりの快挙となります。

➢ シャールズスパイト（SHIRL'S SPEIGHT）

● 馬主：チャールズ・フィプケ氏（Charles Fipke）

1946 年生まれ、カナダ・アルバータ州のエドモントン出身。ブリティッシュコロンビア大学で地質学の学士号を取得すると鉱山開発事業を立ち上げ、1991 年にカナダ北部でエカティ・ダイヤモンド鉱山を発見します。事業で成功を収めた後も鉱物探査の分野で精力的に活動する一方、絶滅危惧種の保護を目的とした基金を設立するなど、社会貢献にも従事。初めて競走馬を購入した 1981 年から競馬界に関わり、アメリカのケンタッキー州に 2 つの牧場を所有するなど、馬主・生産者として数々の活躍馬を輩出し、昨年カナダ競馬で殿堂入りを果たしました。

ロジャー・アトフィールド厩舎に預託して活躍した主な所有馬に、2003 年のターフマイルステークスを勝って、ソヴリン賞で Male Turf Horse に輝いたパーフェクトソウル（本馬の母の父）、08 年のクイーンズプレート優勝馬で同最優秀 3 歳牡馬のノットバーボン、本馬の母で 11 年のブリーダーズカップフィリー&メアターフを制したパーフェクトシャール。これら以外にも自身が発見した鉱山から名付けられたテイルオブエカティが 2008 年のウッドメモリアルステークス優勝からケンタッキーダービーで 4 着に入ったのをはじめ、ジャージータウン（10 年シガーマイルハンデキャップ）、シーキングザソウル（17 年クラークハンデキャップ）、フォーエバーアンブライドルド（17 年ブリーダーズカップディスタフ；エクリプス賞 Older Dirt Female）、ビージャージー（18 年メトロポリタンハンデキャップ）など多くの G1 馬を所有しました。

日本でも競走馬を所有しておりカナテープが昨年、新馬戦と 1 勝クラスを勝ったほか、繁殖牝馬を所有するなど近年は日本の競馬界との関わりも深めています。

● 調教師：ロジャー・アトフィールド（Roger Attfield）

1939 年 11 月 28 日生まれ、イギリスのニューベリー出身。幼少期から馬に親しみ、馬術の障害飛越競技で国際的にも活躍したほか、短期間ながら障害競走のアマチュア騎手としての経験もあります。1970 年にカナダに移住し、翌年に調教師免許を取得。1976 年にカナダで最も歴史と格式のあるクイーンズプレートに初めて管理馬を出走させてノークリフでこれを制すると、これまでにレコードタイとなる同レース 8 勝を挙げています。また、ソヴリン賞最優秀調教師を 8 回受賞するなど、同国を代表するホースマンとして君臨。1999 年にカナダで、2012 年にはアメリカで競馬の殿堂入りを果たしました。

これまで 6 頭のソヴリン賞年度代表馬を手掛けており、そのうちウィズアプルーヴァル（1989 年）、イズベスティア（90 年）、ピートスキー（93 年）はカナダの三冠馬です。前述したフィプケ氏の所有馬以外では、セルーススカウト（1985 年パンアメリカンハンデキャップなど）、アリディード（92 年プリークネスステークス 2 着、93 年カーターハンデキャップ）、ミスケラー（2011 年 E. P. テイラーステークス）、フォルテデイマルミ（13 年ノーザンダンサーターフステークス）で G1 を制しています。

昨年 7 月にはフィプケ氏所有で、2020 年の G1 ナタルマステークス覇者レディスパイツピアで加ナッソーステークスを勝ち、通算 2,000 勝を達成。同年のウッドバイン競馬場のリーディング（獲得賞金順）は 12 位で、同競馬場のオフシーズンは冬にアメリカ・フロリダ州のインディアンタウン、春にケンタッキー州のキーンランドを拠点にしています。日本にはこれまで 2 頭を送り込み、1986 年のジャパンカップでキャロティーン（1987 年イエローリボン招待など G1・2 勝）が 9 着、2010 年のエリザベス女王杯でアーヴェイ（同年のフラワーボウル招待優勝）が 16 着でした。

● 騎手：ジョアン・モレイラ（Joao Moreira）

ブラジル南部パラナ州のクリチバ出身。同国で 2000 年から騎乗を開始し、サンパウロ地区を中心に 1,000 勝以上を挙げました。2009 年にシンガポールに移籍すると、翌年から 4 年連続でリーディングを獲得。同国のシーズン

最多勝記録も次々と塗り替え 2012 年には 206 勝まで記録を伸ばしました。2013 年 10 月からは香港に拠点を移し、14/15、15/16/、16/17 および 20/21 年シーズンにリーディングに輝いたほか、16/17 年には香港レコードとなるシーズン 170 勝を挙げました。

香港での主な G1 タイトルは香港マイル（2014 年エイブルフレンド）、香港カップ（同デザインズオンローム）、香港スプリント（15 年ペニアフォビア、19 年ビートザクロック）、香港ヴァーズ（16 年サトノクラウン、19・21 年グローリーヴェイズ）、クイーンエリザベス II 世カップ（17 年ネオリアリズム）、チャンピオンズマイル（15 年エイブルフレンド、16 年モーリス）。また、2017 年にはラッパードラゴンで史上初の香港 4 歳シリーズ完全制覇を達成しています。香港以外でもアラブ首長国連邦で 2014 年アルクオーツスプリント（アンバースカイ）、ドバイゴールデンシャヒーン（スターリングシティ）、17 年ドバイターフ（日本のヴィブロス）を、オーストラリアでも 14 年クールモアスタッドステークス、15 年ニューマーケットハンデキャップ（ともにブレイゼンボー）、17 年オークリープレート（シャイデル）を制しています。

2014 年の安田記念で初来日し、グロリアスデイズに騎乗して 6 着。ワールドオールスタージョッキーズには 4 回出場し、2015 年優勝、16 年 5 位、17 年 4 位、18 年 5 位でした。2016 年 8 月には初めて短期免許を取得して騎乗し、史上最多タイとなる騎乗機会 7 連勝を記録。2017、18 年も短期免許を取得し、18 年のエリザベス女王杯（リスグラシュー）など重賞 4 勝を含む、JRA 通算 347 戦 114 勝の戦績を残しています。心身の不調を理由に昨秋に香港での騎手免許を返上。ブラジルに帰国して以降、12 月の香港国際競走にはスポット参戦して日本馬 3 頭にも騎乗していますが、サンパウロ地区で 1 月 31 日現在、65 戦して 16 勝を挙げています。